

心を静かにすくいとる

朝比奈 恭

Cinema

『余命10年』(2022年、日本)
監督／藤井道人

話 題の映画『余命10年』を観た。小松菜奈主演の難病もので、RADWIMPSが音楽を担当—この程度しか事前の知識をもたずに観たら、しっかりと作られていたのに驚いた。20歳で数万人に一人と言う不治の病に侵された、小松菜奈演じる若い女性茉莉と、同窓会で再会した坂口健太郎演じる和人ととの恋を描く。

「長く生きて10年」という残酷な運命のため、恋はしないと決めていた茉莉。しかし、裕福な家に生まれ将来が約束されているが、敷かれたレールの上に行くのを拒否して家を飛び出したものの、将来像が描けず生きる希望を失っていた和人。二人は次第にひかれあい、病のことは伏せられたまま幸せな時間を共有してともに生きている実感を得ていく。だが、残された時間はあまりにも短い。告白の時間が迫ってきたが…。

揺れ動く茉莉の心を繊細に演じた小松菜奈がまず素晴らしい。茉莉との交際を通して生きる手ごたえをつかんでいく和人役の坂口健太郎も好演している。共演陣も充実だ。父は松重豊、母は原日出子、姉は黒木華。茉莉の友人には奈緒、山田裕貴。和人が働き始める居酒屋の主人はリリー・フランキー。努めて平静に茉莉と和人を見守る周囲の人々のまなざしが優しいのだ。

エンドタイトルを見て、すべてが理解できた。原作は、茉莉のように原発性肺高血圧症の経験をもとにした小説を文芸社に持ち込んだ小坂流加さん。ベストセラーになった同書の文庫化を前に亡くなってしまった。それを映画化したのが今作。監督は「新聞記者」の藤井道人。脚本は岡田恵和に渡邊真子、そして音楽はRADWIMPS。充実の布陣である。二人、特に茉莉をめぐる人々の思いを、なにげないせりふで丁寧に描きだしていくのは、NHKの朝ドラ「ひよっこ」を手掛けた岡田ら

しい脚本だ。今村圭佑のカメラによる、色彩がにじむような重く暗い画面もいい。今村は「新聞記者」でもカメラを担当しているが、あの映画の暗い画面は言論を封じる社会の閉塞感を伝えていた。『余命10年』の画面も茉莉の運命の重さを表す重苦しいものだが、一緒に観た友人は「桜に透ける空がきれい」と言っていた。「天国は清々しく、明るく、きっと苦しいことはないから大丈夫、と思いたい」と。重苦しさの中にのそくからこそ、希望は一層輝くのだろうか。

満開の桜の下を歩く茉莉と和人に突然疾風が吹く。桜吹雪に驚き、喜ぶ二人の姿をとらえたスローモーション映像は、一瞬が永遠であるような時間をとらえて見事。悲しみを押さえきれず泣く黒木華のアップを画面の中央にすえた構図も素晴らしい。リリー・フランキーと坂口健太郎の切り返しのアップも、画面のどこかに赤を効果的に使った絵作りが決まっている。大げさにならず登場人物たちの心を静かにすくいとる丁寧な演出とカメラに、目を奪われた。RADWIMPSの歌も心にしみた。

私が見た回は中学生や高校生とおぼしき観客で上演前はざわついていたが、映画が始まると彼らは画面をくいているように見つめ、次第にあちこちからすすり泣きが…。暗めの画面でじっくり見せるような映画の魅力に気づいてくれたらいいなと思ったのだ。

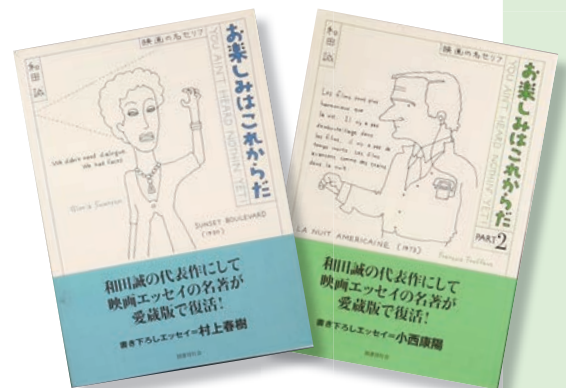
難 病ものといえば、中学生の時、リバイバル公開で見た「ある愛の詩」である。上流社会の御曹司の大学生ライオン・オニールと家柄が違う大学生アリ・マッグローとの純愛を描いた作品で、アリ・マッグローは白血病で死んでしまう。この映画のキャッチコピーにもなった「愛とは決して後悔しないこと」という名せりふは今も忘れられない。

というわけで、今回取り上げる本は、『お楽しみはこれからだ』。3年前に亡くなった人気イラストレーター和田誠が、映画の名せりふをとりあげ、場面のイラストを添えた有名なエッセーで

ある。以前パート7まで刊行されていたのが愛蔵版として復活したものだ。私は中学、高校時代、「キネマ旬報」に掲載されたこの連載を楽しみにしていた。「ソイレント・グリーン」(1973年)や「チャイナタウン」(1974年)など公開映画をリアルタイムで紹介した作品に、昔の映画も加わる自由な楽しさ。作品や俳優の特徴を巧みにとらえたイラストも、せりふのチョイスのセンスもよかった。

例えば、人口が増えて食糧難の近未来を舞台にしたSFスリラーの「ソイレント・グリーン」は、「人間はいつも腐っていた。世界だけが美しかった」。ジャック・ニコルソンが私立探偵を演じた「チャイナタウン」は、「あり余る金を持ってたって、それで何が買えるんだ」「未来だよ」。含蓄のある言葉ばかりであると同時にユニークな映画データベースとなっている。和田自身が無類の映画好きなので何度読んでも細部の発見があり、その作品を見てみたいくなるのだ。

この愛蔵版には書下ろしエッセイの葉の特典がある。初回は村上春樹。子供のころ父親と観たアクション映画の小品「拳銃の罠」を巡り、和田誠の映画狂ぶりを紹介して楽しい。ちなみに「拳銃の罠」はTSUTAYAの発掘良品としてリリースされている。(文中敬称略)



Book

『お楽しみはこれからだ』
『お楽しみはこれからだPART2』
和田 誠著、国書刊行会、各2970円